

諸外国の保育制度について (1)

— アメリカにおける幼児教育の考察から —

木 暮 美 香

概 要

諸外国における保育の現状について、まず本稿では、アメリカの幼児教育に焦点をあてて考察を進めていった。現行の学校制度と保育制度の関連性、そこに至るまでの歴史的背景、子どもや幼児教育に関する定義、幼児期のプログラムに含まれる様々な施設とそこで行われている実践について細かくみていった。

今回の考察から、アメリカの幼児教育に関する特色として、その多様性、地域性、及び柔軟性ということが導き出された。歴史・文化・社会的背景こそ違うものの、他国の経験や実践からは学べるところも多い。特に、アメリカは様々な問題を抱えながらも新たな対処法を打ち出し、敏速に対応していく。そこでは、政府を動かす国民一人一人の力、つまり親や保育者一人一人の高い意識が強い原動力となって働いている。

はじめに

アメリカにおける幼児を対象とした就学前の教育は、小学校にあがる準備段階として、また学校教育制度の一環とスムーズに連携していく役割を担っている。その教育施設としては、殆どが公立 (Public) で無償 (Non Profit) の「幼稚園」 (Kindergarten) と、多数が私立 (Private) で営利的 (Profit) な「保育学校」 (Nursery School) の二つに大別され、ともに連邦教育省の管轄となっている。学校制度の全体像に関しては図1に示す。ただし、アメリカでは、各州 (State) によって教育制度が異なり、9,000もの学区 (School District) が存在するため、学校形態も図1に限らず様々である。義務教育期間も8～12年とまちまちで、就学年齢も5歳～や8歳～の州もあることを付け加えておく。

一般的に、幼稚園は公立小学校 (Elementary School) に付設され、義務教育開始直前の、すなわち5歳児 (日本の場合と異なり、始業が9月で

あるため、そのスクールイヤーの9月1日までに満5歳であることが条件となる) を対象として1年間の教育を行っているところが多いが、なかには4歳児から受け入れの2年制幼稚園もみられる。週5日で、半日制 (Half - Day) 及び全日制 (Full-Day) をとっているが、最近では全日制が増加の傾向にある。義務化されてはいないものの、5歳児の就園率は97%を越えるほどで、今やその「公教育性」は明らかといえる。これほどまでに浸透してきたアメリカの幼児教育について、その発展の歴史的背景、また保育との関係性から多様化する定義及び施設の現状理解を通して、現在アメリカが抱えている課題を探っていきたい。そこからは我が国の保育に対しても何らかの示唆が得られることを期待している。

1. 幼児教育の歴史

1855年に、フレーベル (Froebel) の門下生であったドイツ婦人、シュルツ (Schurz) がウィスコンシン州のウォータータウンの自宅に幼稚園

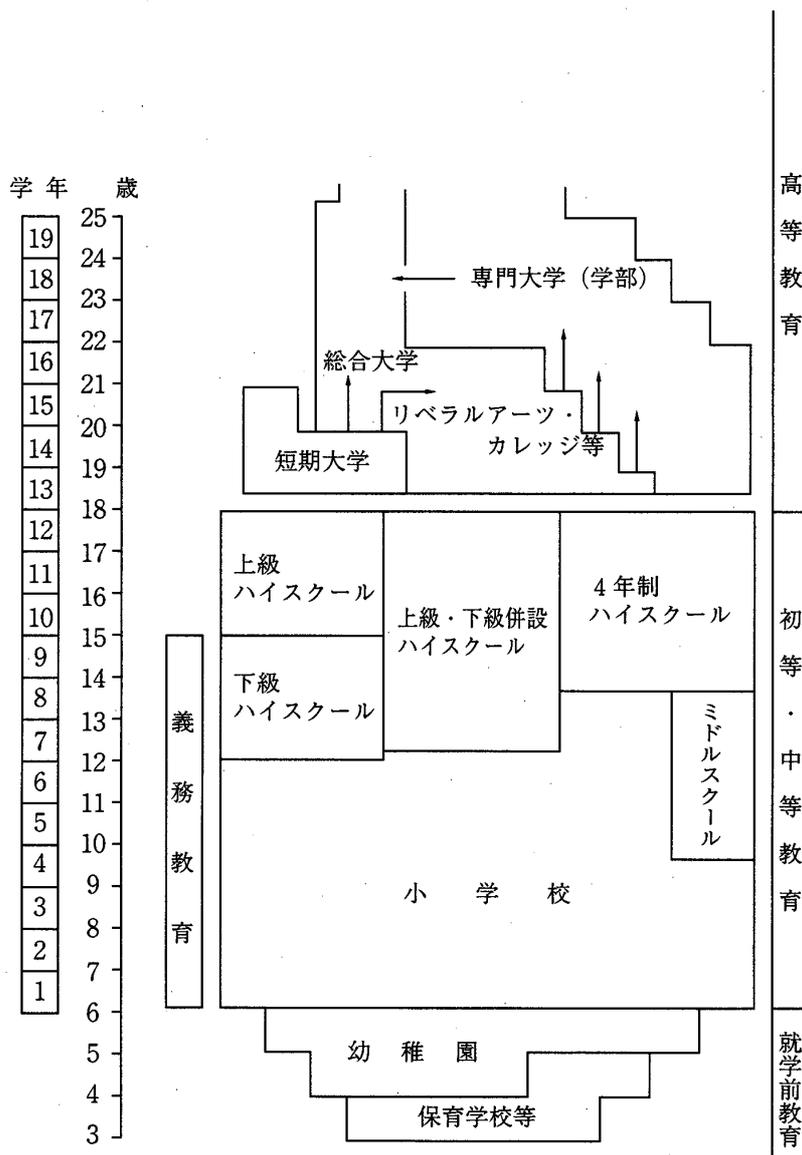


図1 アメリカの学校制度

を開設した。これがアメリカ初の幼稚園であるが、実際はドイツ移民のためのドイツ語による幼稚園であった。

その後、シュルツから教えを受けたピーボディー (Peabody) が、1860年、ボストンの自宅に初の「英語を話す幼稚園」を開設し、その後も幼稚園普及運動に取り組んだ。ピーボディーは、公立小学校と併設し、幼稚園を公的な機関として、学校教育システムの中に位置付けることを考えていた。

そして、それを実現したのが、やはりドイツ婦人のブロー (Blow) であった。彼女により、1873年、セントルイスに初の公立幼稚園が開設

された。その成功に刺激され、各地で公立幼稚園が発展していくことになったのである。しかし、ブローはフレーベルの教育理念と教育方法を最も忠実に理解し、それを実際の教育に移していった故に、非常に厳格なフレーベル主義の幼稚園が普及していくことになった。

やがて、19世紀末頃から、幼児の発達を無視した形式的なフレーベルの恩物主義保育は、新教育の立場からの強い批判を受けるようになる。誤ったフレーベル主義を克服し、新たな教育を展開したのがデューイ (Dewey) であり、デューイの教育理念を幼稚園教育において具体化していった

のが大型積み木を創作したことで有名なヒル(Hill)であった。こうして、子どもの興味や経験を重んじる児童中心主義教育が進められていくようになり、以来、幼稚園は制度的にも小学校の下に延長した教育機関となり、公・私立の別ができていった。

一方、保育学校は幼稚園よりも半世紀以上遅れて出現した。1915年、シカゴ大学に勤める教職員の主婦達のために「協力保育学校」(Cooperative Nursery School)という形で、イギリスから移入されたものに始まり、正式な保育学校は、1920年にコロンビア大学に付設されたものがその最初と考えられている。以来、保育学校は一般に普及し、幼稚園就園前の3・4歳児を対象とした就学前教育機関として、次第に公教育体系の中に組み込まれていくようになったのである。

もともと、ヨーロッパからアメリカにもたらされた幼児のための教育には、そのルーツとしてイギリスの幼児学校(Infant School)、ドイツの幼稚園(Kindergarten)、そしてフランスの保育所(Creche)の3つがあげられる。

幼児教育のこれらの施設は、「学校教育」(School Education)の立場から、イギリスの幼児学校やドイツの幼稚園の系統に属するものとして、アメリカの幼稚園や保育学校の機能が着目され、そして公立学校システムの中に吸収されて、全ての幼児に対する教育の機会均等を保証するための公教育性の強化を固めてきた。

一方、「社会福祉」(Social Welfare)の観点からすれば、フランスの保育所の流れを汲むものとして、アメリカの保育所(Day Nursery, Day Care Center)が、特に低収入の貧困家庭に属する乳幼児を対象として、保育だけでなく生活指導、栄養・看護や医療治療、また両親教育や家庭指導といったことまで、広く児童福祉から社会政策に関することまで実施している。

アメリカにおいても、1960年代半ば頃までは、

幼児の保育(Care)と教育(Education)とは二分されて考えられていた。教育は、主として幼稚園や保育学校で行い、保育は保育所で行うというように単純に二分化して捉える傾向が見られた。そして、幼稚園が学校教育の中に組み込まれ、安定した成長を遂げてきたのに対し、保育所は今だ様々な問題を抱えているといえる。

そんなアメリカの保育所も歴史は古く、植民地時代から既に設立されていたともいわれる。公式に最初の保育所は、1838年、ボストンに設立され、漁業を営む家庭の母親や未亡人の子ども達の為の託児所であったとされている。

移民の増大、経済恐慌、あるいは戦争の勃発など、国家としての危機が生じる度に連邦政府は、その対策の一つとして保育所の設立に力を注いだ。しかし、そんな危機の時期を過ぎると、保育所への関心も低下傾向を見せ、その繰り返しが続いた。基本的に「子育ては自分で」とか「子育ては個人の仕事」といった考えがあって、保育所の拡充を妨げていたのである。

1970年代に入って、女性解放運動から女性の社会進出が加速化し、働く母親が増えることになる。乳幼児を持つ母親の就労が増大してくると、保育所の必要性を訴える声が社会の各層からあがるようになり、その結果として、デイ・ケア・センター(Day Care Center)に代表される多様な保育施設が充実し、特に公的な拡充が進んでいった。

1980年代は、保育所要求がかつて以上に高まり、100以上の保育所関係法案が国会を通過したといわれている。一方で、当時のレーガン(Reagan)大統領の拒否権にあい、次々に廃案となった。しかし、そのことが却って、国民に子どもや家族あるいは保育者の生活に対する連邦政府の責任を目覚めさせる結果となり、ついに1990年「よりよい育児のための法律」(Act for Better Child Care)が実現することとなった。

この20年間における保育ニーズの高まりは、

それまでの幼児教育や保育の見方、サービスの内容を一変してきた。教育や保育・福祉は、分けて考えられるものではないという認識が日本と同様、アメリカでも強くなってきている。そこで、幼児教育に対する定義も変わりつつある。

2. 幼児教育の定義

幼児教育及び保育関係者によって構成されるアメリカ最大の民間団体である全米幼児教育協会 (the National Association for the Education of Young Children = NAYCE) における定義が一般的に浸透している。まず、幼児期 (Early Childhood) を子どもが誕生してから8歳まで (Birth-8) と見なし、小学校低学年 (Elementary Grades) にも適用する点に注目したい。アメリカで使われている子どもに関する一通りの名称については表1の通りである。さらに、教育と保育を一元化して捉えようとする傾向にあるアメリカにおいては、新たに「幼児期のプログラム」 (Early Childhood Program) という表現が使われるようになってきている。

「幼児期のプログラム」とは、0歳から8歳ま

での子ども達のために、センターや家庭あるいは幼稚園や小学校といった施設において提供される、半日もしくは全日制のグループプログラムやレクリエーションプログラムのことを総称している。それに対し、「幼児教育」 (Early Childhood Education) とは、そういったセッティングの中で行われる教育的内容のことであり、プログラムの中に含まれて考えられるようになった。

つまり、乳幼児期の多様なサービス活動の全体を総括する用語として、もはや「幼児教育」よりも「幼児期のプログラム」の方が適切と考えられるようになってきたのである。このことから、教育と保育とを一体化して考える方向にあることがわかる。

3. 幼児教育の施設

アメリカにおける幼児教育及び保育施設 (先にも述べたように幼保一元化の傾向にある) の名称や、そこでの目的・保育内容・対象となる子どもの年齢等は非常に多様で (表2にプログラムを列記した)、その全てを把握することは実際かなり

表1 「子ども」に関する定義

Name	Description	Age
Baby	Generic term referring to a child from birth through the first 2 years of life	Birth to 2 years
Neonate	Child during the first month of life, from Latin words <i>neo</i> (new) and <i>natus</i> (born); usually used by nurses, pediatric specialists, and people working in the area of child development	Birth to 1 month
Infants	Children from birth to the beginning of independent walking (about 12 months of age)	Birth to 1 year
Toddlers	Children from the beginning of independent walking to about age 3; the term <i>toddler</i> is derived from the lunging, tottering, precarious balanced movement of children as they learn to walk.	13 months to 3 years
Preschoolers	Children between toddler age and age of entrance into kindergarten or first grade; because kindergarten is becoming more widespread, it is customary to refer to 4-year-olds as preschoolers.	3 to 5 years
Child/children	Generic term for individuals from birth through the elementary grades	Birth to 8 years
The very young	Used to identify and specify children from birth through preschool	Birth to 5 years

表2 幼児期のプログラム

Program	Purpose	Age
Early childhood program	Multipurpose	Birth to grade 3
Child care	Play/socialization; baby-sitting; physical care; provides parents opportunities to work; cognitive development; full-quality care	Birth to 6 years
High school child care programs	Provide child care for children of high school students, especially unwed parents; serve as an incentive for student/parents to finish high school and as a training program in child care and parenting skills	6 weeks to 5 years
Drop-off child care centers	Provide care for short periods of time while parents shop, exercise, or have appointments	Infancy through the primary grades
After-school care	Provides care for children after school hours	Children of school age; generally K to 6
Family day care	Provides care for a group of children in a home setting; generally custodial in nature	Variable
Employer child care	Different settings for meeting child care	Variable; usually as early as 6 weeks to the beginning of school
Corporate child care	Same as employer child care	Same as employer child care
Proprietary care	Provides care and/or education to children; designed to make a profit	6 weeks to entrance into first grade
Nursery school (public or private)	Play/socialization; cognitive development	2 to 4 years
Preschool (public or private)	Play/socialization; cognitive development	2½ to 5 years
Parent cooperative preschool	Play/socialization; preparation for kindergarten and first grade; baby-sitting; cognitive development	2 to 5 years
Baby-sitting cooperatives (co-op)	Provide parents with reliable baby-sitting; parents sit for others' children in return for reciprocal services	All ages
Prekindergarten	Play/socialization; cognitive development; preparation for kindergarten	3½ to 5 years
Junior kindergarten	Prekindergarten program	Primarily 4-year-olds
Senior kindergarten	Basically the same as regular kindergarten	Same as kindergarten
Kindergarten	Preparation for first grade; developmentally appropriate activities for 4½- to 6-year-olds; increasingly viewed as the grade before first grade and as a regular part of the public school program	4 to 6 years
Pre-first grade	Preparation for first grade; often for students who "failed" or did not do well in kindergarten	5 to 6 years
Interim first grade	Provides children with an additional year of kindergarten and readiness activities prior to and as preparation for first grade	5 to 6 years
Transitional or transition classes	Classes specifically designed to provide for children of the same developmental age	Variable
Developmental kindergarten	Same as regular kindergarten; often enrolls children who have completed one or more years in an early childhood special education program	5 to 6 years
Transitional kindergarten	Extended learning of kindergarten preparation for first grade	Variable
Preprimary	Preparation for first grade	5 to 6 years
Primary	Teaches skills associated with grades 1, 2, and 3	6 to 8 years

Program	Purpose	Age
Toy lending libraries	Provide parents and children with games, toys, and other materials that can be used for learning purposes; housed in libraries, vans, or early childhood centers	Birth through primary years
Lekotek	Resource center for families who have children with special needs; sometimes referred to as a <i>toy or play library</i> (<i>lekotek</i> is a Scandinavian word that means play library)	Birth through primary years
Infant stimulation programs (also called parent/infant stimulation and mommy and me programs)	Programs for enhancing sensory and cognitive development of infants and young toddlers through exercise and play; activities include general sensory stimulation for children and educational information and advice for parents	3 months to 2 years
Multiage grades or groups	Groups or classes of children of various ages; generally spanning 2 to 3 years per group	Variable
Dual-age classroom	An organizational plan in which children from two grade levels are grouped together; another term for multiage grouping and for maintaining reasonable student-teacher ratios	Variable
Learning families	Another name for multiage grouping. However, the emphasis is on practices that create a family atmosphere and encourage living and learning as a family. The term was commonly used in open education programs. Its revival signifies the reemergence of progressive and child-centered approaches.	Variable
Junior first grade	Preparation for first grade	5 to 6 years
Split class	Teaches basic academic and social skills of grades involved	Variable, but usually primary
Head Start	Play/socialization; academic learning; comprehensive social and health services; prepares children for kindergarten and first grade	2 to 6 years
Follow Through	Extended Head Start services to grades 1, 2, and 3	6 to 8 years
Private schools	Provide care and/or education	Usually preschool through high school
Department of Children, Youth, and Families	A multipurpose agency of many state and county governments; usually provides such services as administration of state and federal monies, child care licensing, and protective services	All
Health and Human Services	Same as Dept. of Children, Youth, and Families	All
Health and Social Services	Same as Dept. of Children, Youth, and Families	All
Home Start	Provides Head Start service in the home setting	Birth to 6 or 7 years
Laboratory school	Provides demonstration programs for preservice teachers; conducts research	Variable, birth through senior high
Child and Family Resource Program	Delivers Head Start services to families	Birth to 8 years
Montessori school (preschool and grade school)	Provides programs that use the philosophy, procedures, and materials developed by Maria Montessori	1 to 8 years
Open education	Child-centered learning in an environment characterized by freedom and learning through activities based on children's interests	2 to 8 years
British primary school	Implements the practices and procedures of open education	2 to 8 years
Magnet school	Specializes in subjects and curriculum designed to attract students; usually has a theme (e.g., performing arts); designed to give parents choices and to integrate schools	5 to 18 years

難しいといえる。

保育学校 (Nursery School) とは、3・4 歳児を対象とした教育プログラムの一つである。その多くは半日制で、両親が共働きでない子ども達のためにデザインされている。しかし、実際の保育時間は2、3時間から6、7時間と学校により異なっている。典型的な保育学校の日課は、登校と健康チェック、屋外及び屋内での活動、手洗い、音楽、スナック時間、レコードを聴いたり読書しながらの休息、屋外での自由遊び、お話の時間、手洗い、帰宅までの屋外での自由遊び、といった活動を含んでいる。

保育学校の目的は、遊びを通して活動的な学習を行うことである。しかし近年、幼稚園の知的カリキュラムが保育学校で行われるようになってく

ると、その結果として、よい保育学校の特徴であったインフォーマルな遊び環境での子どもを中心としたプログラムは、形式的な教師中心のセッティングに取って代わられるようになってきている。

一般的に、プレスクール (Preschool) も、幼稚園に入るまでの子ども達を対象とした教育的プログラムを指す。3・4 歳児を対象としたプレスクールのプログラムもまた、急速に公教育システムの一部となりつつある。その中でも特に低所得層の子ども達と、その家族を対象としたものがそうした傾向にある。プレスクールの目的を達成すべく日課もまた多様であるが、多くは子ども自身が選択出来る遊び活動やラーニング・センター (Learning Center) 活動を中心としている。全日

表3 ラーニング・センター

Center	Concepts	Center	Concepts
Housekeeping	Classification Language skills Sociodramatic play Functions Processes	Woodworking (pinewood, cardboard, Styrofoam)	Following directions Functions Planning Whole/Part
Water/sand	Texture Volume Quantity Measure	Art	Color Size Shape Texture Design Relationships
Blocks	Size Shape Length Seriation Spatial relations	Science	Identification of odors Functions Measure Volume Texture Size Relationships
Books/language	Verbalization Listening Directions How to use books Colors, size Shapes	Manipulatives	Classification Spatial relationships Shape Color Size Seriation
Puzzles/perceptual development	Names Size Shape Color Whole/part Figure/ground Spatial relations		

制の主な日課としては、以下のような活動を含んでいる。オープニング・アクティビティー（登校、一人一人とあいさつ、健康チェック、他の子どもが来るまで静かに出来る個人活動等）、話し合い（みんなであいさつ、その日の活動に関する説明）、ラーニング・センター（コンセプトに沿ってあらかじめ用意されたいくつかのセンターを自由に選択し活動する、表3に代表的なセンターを示した）、トイレ・手洗い、昼食（用意や片づけ）、休憩（お話やレコード、音楽を聴いたり、リラクゼーション）、午睡・静かな活動、トイレ、おやつ（スナック）、センター活動、その日の特別活動、グループタイム（話し合い）等。半日制や週に2、3日だけ通うプレスクールもあるので、やはりその内容も様々である。

繰り返しになるが、幼稚園（Kindergarten）についても、地方分権制のため、入園時期や就園年数などは州法によって定められ、それぞれ異なっている。その多くは小学校に併設し、主に5歳児を対象とし、就学前1年間の教育を行っている。実際、公立学校の幼稚園は既に5歳児にとってはほぼ普遍的で、もはや「就学前」とは見なされない。幼稚園は小学校の学年の一部として、「幼～6年」（K-6）というように、一環的な見方をされている。

アメリカの幼稚園教育は、あくまでも、幼児の興味や要求にそって行われていること、幼稚園の基礎理念が小学校低学年（Primary Years）の教育に強く影響していること、教育内容・方法ともに多様で各園が独自のものを持っていることなどが特色といえる。

基本的には、遊び活動が中心だが、読み・書き・算数（3R）の教育を含む小学校への準備として、日課の中で教科制として採用されているところも多い。やはり、ラーニング・センター・アプローチが用いられ、子ども達は教室内の家事・水・砂・ブロック・本・パズル・積み木・アート・科学・ゲームといったそれぞれのコーナーを

自由に移動し、その日の課題を行っていく。日本のようにクラス一斉で同じ活動をするというよりも、圧倒的に個人的な活動が多くみられる。

公立学校や他の機関が一つのプログラムを5歳児対象に、もう一つを4歳児対象として運営した場合、前の方のプログラムに対して幼稚園、そして後の方に対して保育学校やプレスクールという名称が当てられる。

以上で述べた施設は、主に教育的役割を担っているが、保育センター（チャイルド・ケア）（Child Care）は、幼稚園就園前の子ども達に対するプログラムやサービスの総称で、どちらかというといふ日本の保育所に近いものである。（デイ・ケアという用語もチャイルド・ケアと同義で用いられるが、チャイルド・ケアの方が子どもに焦点を当てており、よりの確な表現として、アメリカでは好んで用いられている）。チャイルド・ケア・プログラムの主な目的は、学校に通っていない子ども達、及び学童の放課後のケアである。プログラムの内容は、子どもの総合的発達の援助を目指したものから教育的なものまで様々である。

保育センターについては、働く母親のために設けられ、やはりその制度は州によって異なるが、多くは3歳児から5歳児を対象に、約10時間の保育が行われている。しかし、保育センターは働く母親の要求を満たしておらず、2歳以下の乳幼児の保育を含めて、個人的に家庭内で保育する、いわゆる家庭保育にかなりの部分を依存している。これがファミリー・デイ・ケア（Family Day Care）と呼ばれているものである。

1965年に始まったヘッドスタート計画（Head Start）は、当時貧困児や文化的に恵まれない子ども及び保護者への連邦政府の補償教育であり、児童発達センター（Child Development Center）を各地に設置し、医療から知能までの発達の幅広いプログラムに沿った教育を行い、貧しい環境にある子ども達の発達上のハンディキャップを就学時まで回復しようとした。

その後もフォロースルー計画(Follow Through)やホームスタート計画(Home Start)などが実施され、幼児期の重要性が再認識されることとなった。しかし、知的面促進という社会の強い要請により、環境への適応を第一義的に考えた幼児教育の在り方への疑問も多く、現在も継続して論議がなされている。

これらは、アメリカの幼児プログラムの代表的なものである。実際には、その保育・教育内容が類似しているが、名称の異なる多くの施設やプログラムが存在する。日本の場合に比べて、選択肢が多いということは明確な事実であろう。

おわりに

アメリカの幼児教育の特色は、良くも悪くもその多様性、地域性、そして柔軟性ということができるのではないだろうか。

広大な面積、州単位の自治制度、移民による文明の歴史、多民族・多人種の共存、自由を求め、個人を尊重する国民性、こういったこと全てがアメリカ幼児教育の背景にあるということを念頭に置いて、そして、歴史・文化・社会的な背景こそ違うものの、それぞれの経験や実践からは学べるところも多いことを痛感する。

アメリカにおいて、家族形態の変容は、やはり子どもに大きな影響を与え、保育者にとっても常に重要な課題である。核家族化をはじめ、離婚に

よる単親・里親家族、同性愛者に育てられている子どもなど、親の姿も多様化している。貧困、虐待、誘拐、薬物、銃を用いた少年犯罪、エイズ問題など、子どもが安心して育つ環境が整っているとはいえない。しかし、様々な問題を抱えながらも、新たな対処法を打ち出し、敏速に対応していく姿は勇ましくさえ感じられる。そしてそこでは、政府を動かす国民一人一人の力、つまり親や保育者一人一人の意識の高さも強い力となっている。

本稿ではアメリカに焦点をあてたが、今後は諸外国の保育・幼児教育事情について多角的に比較考察していきたい。

参考文献

- 1 大戸美也子：アメリカ発達補償教育のその後、森上史郎編、幼児教育への招待(1998)、182-183、ミネルヴァ書房
- 2 大戸美也子：主要国の保育の現状－アメリカ、日本保育学会編、諸外国における保育の現状と課題(1997)、6-19、世界文化社
- 3 ギルバート・大町真須子：アメリカ小学教育の挑戦(1993)、くもん出版社
- 4 黒崎典子：諸外国の保育－アメリカ、森上史郎編、幼児教育への招待(1998)、42-45、52-53、ミネルヴァ書房
- 5 George S. Morrison: Early Childhood Education Today, Sixth Edition. (1995)

(2001年9月28日 受理)

About Childcare and Early Childhood Education in Foreign Countries (1)
— A Study of Early Childhood Education in the U.S. —

Mika Kogure

Abstract

This is a study of early childhood education in the U.S. and is prepared as a reference for follow-up studies on childcare and early childhood education in foreign countries. At first, the history of childcare and early childhood education in the U.S. is summarized. Then, labels for children and the terminology of early childhood education are discussed. Finally, types of early education programs and practices are explained. It shows that the characteristics of the U.S. childcare and education system are in its diversity, locality, and flexibility. Japanese educators can learn a lot from their American counterparts.